

## 地中海古代都市の研究 (111)

## メッセネのアスクレピオス神域のコリント式柱頭

9. 建築歴史・意匠 - 4. 西洋建築史

ギリシア本土 メッセネ ストア コリント式柱頭

## 1. はじめに

メッセネのアスクレピオス神域にあるストアは、中央の中庭を四方から囲むコリント式ストアである。本稿は熊本大学ギリシア古代建築調査団（団長 伊藤重剛）が2001年と2002年夏に行った実測調査<sup>1)</sup>によって明らかになった、ストアのコリント式柱頭についてその現状を報告し、ストアのコリント式円柱を復元する手がかりを得ようとするものである。

## 2. ストアのコリント式柱頭の概要

アスクレピオス神域のストアの遺構には、その上部構造であったと思われる無数の部材が残されているが、柱頭と判断できる部材は全てコリント式柱頭であり、その数は27個であった。

これらの柱頭は、柔らかい砂岩を用い、その表面をスタッコ<sup>2)</sup>で仕上げるといって造られたので、残存状態が芳しくない。また、どの柱頭にもアカンサスの葉と渦巻の装飾があるため、一見して同じ形状に見えるが、詳しく観察するとそれぞれ異なった装飾が施されており、これが柱頭の復元を困難にさせる原因である。

以下、個々の柱頭の形状と寸法について、その特徴を洗い出し、さらに共通する特徴から、復元の手がかりとなる部分に注目して、分類を行う。ただし柱頭各部の寸法は、その寸法がオーダーのプロポーションを決定する上で重要だったと思われる部位に着目して分析した。また、柱頭の各部名称については、図1を参照されたい。

## 3. 柱頭各部の寸法

柱頭の部材は、柱身と一体化して一部が柱頭に付随しているものと、柱頭の部分のみが一つの部材になっているものがあり、以下これらを総称して柱頭部材と呼ぶことにする。柱頭部材のうち柱頭の高さを実測したところ、実測可能だった石材は11個あり、結果として大きくて2種類の高さに分かれることが判明した。すなわち、高さの大きい石材(平均0.601m・実測数5)と小さい石材(平均0.453m・実測数6)で、その差は0.148mであった。

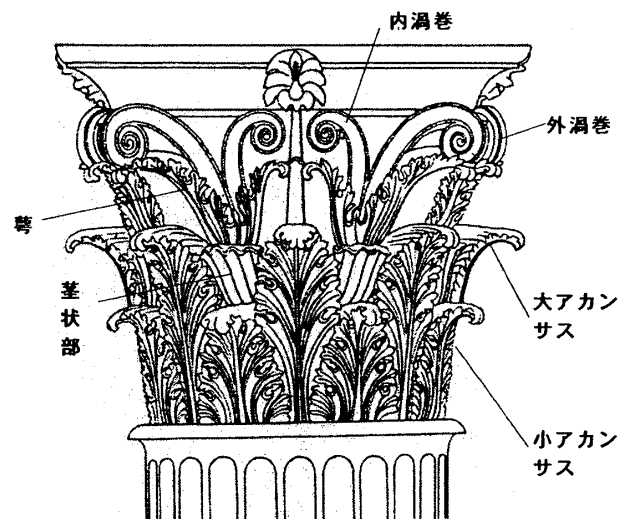
正会員 ○吉武隆一<sup>3)</sup> 林田義伸<sup>1)</sup>伊藤重剛<sup>2)</sup> 古賀智博<sup>3)</sup>

柱頭下部にはアカンサスの葉が2段つけられており<sup>3)</sup>、下段のアカンサスの葉を小アカンサス、上段のアカンサスの葉を大アカンサスと呼ぶことにする。ここで、小アカンサスの葉の高さを実測したところ、22の部材で実測できた。その結果、柱頭高さと同様に大小2種類に分けられると思われる。すなわち、アカンサスの高い部材(平均値0.21m・個数11)、アカンサスの低い部材(平均値0.12m・個数11)に分けられ、その差は0.09mあった。つまり、大きい部材の小アカンサスは、小さい部材の小アカンサスより1.75倍大きいことになる。

ここで、柱頭と小アカンサスの葉の高さを比較すると、当然ながら、柱頭の背が高い部材は全て小アカンサスの葉が大きく、逆に柱頭の背が低い部材は全て小アカンサスの葉が小さい。従って、ストアの柱頭は全て同じ大きさではなく、2種類の柱頭があったと考えて間違いないことが確かめられた。

## 4. 柱頭各部の形状

コリント式柱頭は、通常1段のアカンサスは8枚であるが、このストアには1段のアカンサスの葉の数が8枚のもの<sup>4)</sup>と12枚のものがあった。<sup>4)</sup>1段のアカンサスの葉が8枚の柱頭は8個、アカンサスが12枚の柱頭は10個あって、葉の数が8枚の柱頭は全て大きく、葉の数が12

図1 コリント式柱頭各部名称<sup>12)</sup>

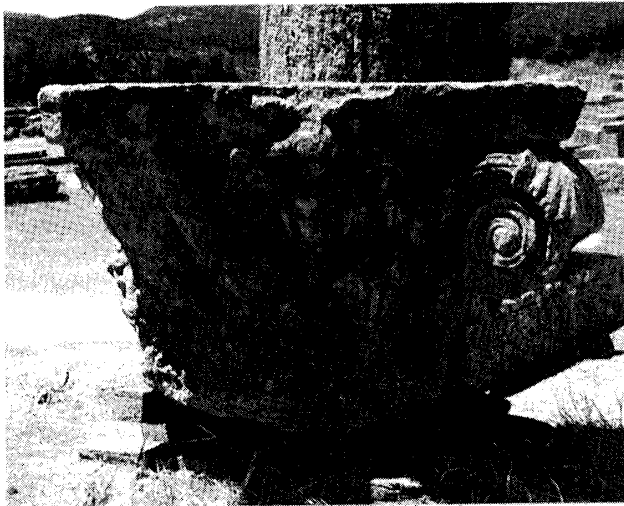


写真1 小さい柱頭部材(C25)



写真2 大きい柱頭部材(C24)

表1-3 アスクレピオス神域のストアのコリント式柱頭部材

表1 小さい柱頭部材 (アカンサスの葉が1段に12枚あって、外渦巻が大きい)

部材番号	タイプ	エロス像の有無 (○・×)	アカンサスの葉	外渦巻	小アカンサスの葉高さ	柱頭高さ
C07	小	○	1段に12枚	大きい	0.14	0.451
C10	小	不明	1段に12枚	大きい	0.16	
C11	小	不明	1段に12枚	特に大きい	0.15	0.458
C15	小	○	1段に12枚	大きい	0.15	
C17	小	○	1段に12枚	特に大きい	0.12	0.450
C18	小	○	1段に12枚	大きい	0.15	0.454
C21	小	不明	1段に12枚	大きい	0.15	
C22	小	不明	1段に12枚	不明	0.16	
C25	小	○	1段に12枚	大きい	0.16	
C27	小	○	不明	大きい	0.16	0.463
平均値					0.15	0.455



写真3 特殊な柱頭部材(C23)

表2 大きい柱頭部材 (アカンサスの葉が1段に8枚あって、外渦巻が小さい)

部材番号	タイプ	エロス像の有無 (○・×)	アカンサスの葉	外渦巻	小アカンサスの葉高さ	柱頭高さ
C01	大	○	1段に8枚	小さい	0.20	0.631
C02	大	○	1段に8枚	小さい	0.19	0.601
C03	大	×	1段に8枚	小さい	0.19	0.595
C04	大	○	1段に8枚	小さい	0.20	0.591
C05	大	不明	1段に8枚	小さい	0.20	
C06	大	○	1段に8枚	小さい	0.21	
C16	大	不明	1段に8枚	小さい	0.20	
C20	大	不明	不明	不明	0.20	
C24	大	○	1段に8枚	小さい	0.21	0.586
平均値					0.20	0.601



写真4 特に大きな外渦巻を持つ柱頭部材(C11)

表3 残存状態が悪いか、明らかに表1,2とは異なる柱頭部材

部材番号	タイプ	エロス像の有無 (○・×)	アカンサスの葉	外渦巻	小アカンサスの葉高さ	柱頭高さ
C08	不明	×	不明	小さい	0.20	
C09	不明	○	不明	大きい		
C12	不明	×	不明	大きい		
C13	不明	不明	不明	不明		
C14	不明	×	不明	小さい		
C19	不明	不明	1段に12枚	大きい	0.18	
C23	不明	×	不明	特殊	0.15	0.454
C26	不明	不明	不明	不明		



写真5 植物模様を持つ柱頭部材(C12)

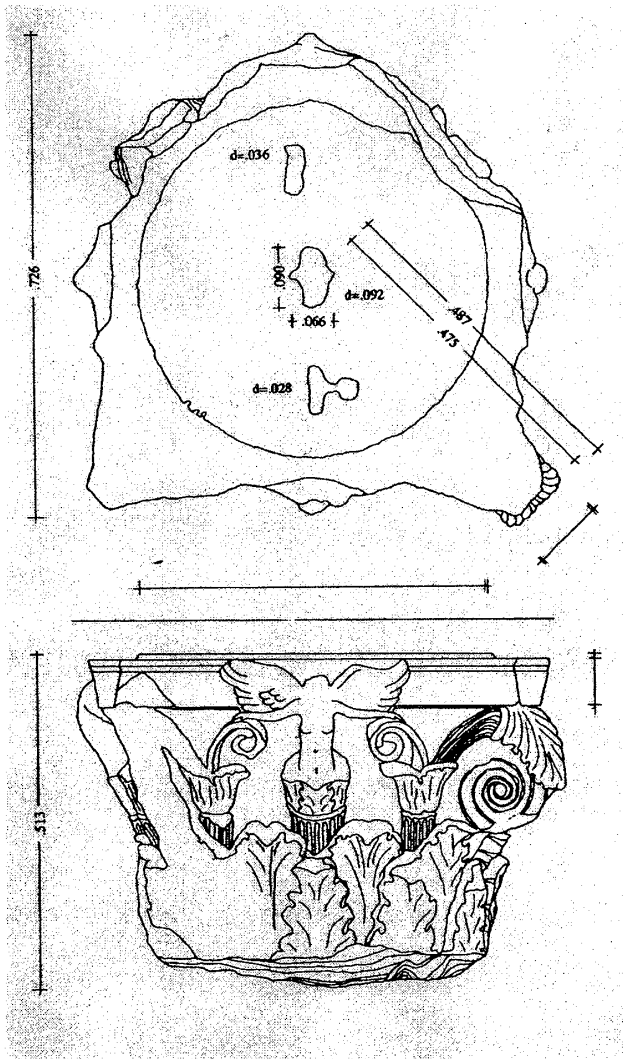


図2 小さいコリント式柱頭部材の現状図(C25)

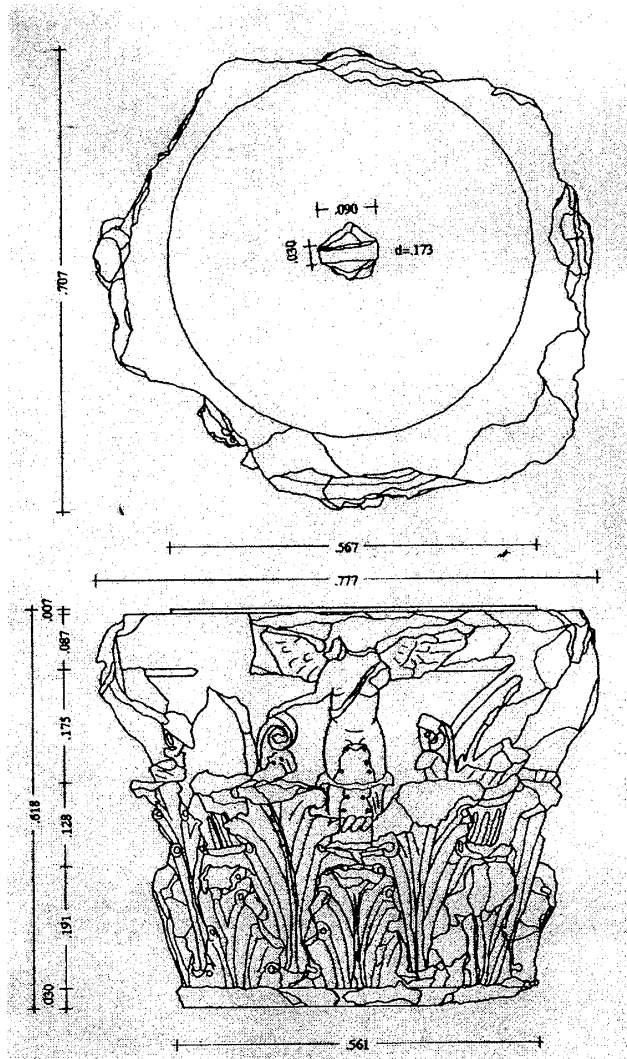


図3 大きいコリント式柱頭部材の現状図(C24)

枚の柱頭は全て小さい柱頭であった。(図2,3)

また、コリント式柱頭のプロポーションとしては大きな外渦巻が付いている部材<sup>5)</sup>もある。この大きな外渦巻は、上から大きい葉が覆い被さっているが、このような大きな葉が外渦巻に被さる例はまれであり、大きな特徴の一つである。(写真1、図2) 大きな外渦巻が付いていたと柱頭は全部で8個あった。<sup>6)</sup> 大きな外渦巻が付いている柱頭は、小さい柱頭であるから、小さい柱頭には大きな外渦巻があり、逆に大きな柱頭には小さな外渦巻が付いていたと考えて良いだろう。

外渦巻とは別に、柱頭側面中央からアバクスの真ん中にかけて、エロスの小さな彫像が施されている。このエロス像は、側面中央の小アカンサスの葉からわき出る莖状部の、されに上にある萼から立ち上がっている。エロス像の頭部から肩までは、アバクスにかかっており、大きな翼が両肩から上に広がっている。エロ

ス像によっては、矢筒を櫛にかけているものもある(C24)。膨らんだ胸部と腰のくびれ方から女性像であるように見えるが、男根と思われる小さな突起があるものもあって、あるいは中性として造られたのかもしれない。このエロス像は必ずしも全ての面にあるわけではなく、大きさも様々である。<sup>7)</sup> 例えばエロス像のある面が4つ、つまり全ての面にエロス像が彫られている柱頭部材は1つあった(C24, C25)。逆にエロス像がどこにも無い柱頭部材も1つあった(C03)。またエロス像の代わりに植物模様がある柱頭部材もあった(C3, C6, C8, C12, C14, C23)。(写真5)

内渦巻はほとんどの場合、外渦巻と同じ萼から伸びているが、まれに中央のエロス像の下にある萼から伸びているものもある(C2, C4)。いずれの場合も、内渦巻はエロス像の手の平まで伸びて、これを支える形状になっている。

以上は、一見してほとんど同じ系統のコリント式柱頭と分かる部材だが、1つだけ明らかにこれらと異なる柱頭部材があった(C23)。この柱頭部材の中央には大きなパルメット模様があり、アバクスの角の突出が少なく、上面はむしろ正方形に近い。柱頭高さは、0.454mで小さい柱頭部材の平均値(0.450m)とほとんど変わらないことから、もともと小さい柱頭部材だったものが、後に加工を加えたか、別の用途に転用されたのかもしれない。<sup>9)</sup>

## 5. 考察

以上のように、ストアの柱頭部材は、各々形状が異なるが、全体として共通する要素をまとめると、大きく2種類のコリント式柱頭が存在していたことが分かった。小さい柱頭は、大きな外渦巻があってアカンサスの葉が12枚あり、逆に大きい柱頭は、外渦巻が小さくアカンサスの葉が8枚ある。柱頭中央にはエロス像があって、その左右には内渦巻が、大アカンサスの間から立ち上がる莖状部とその上の萼から飛び出していた。アスクレピオス神域のストアは2重の列柱を持つことから、内部と外部の円柱は別々のコリント式オーダーで造られていたと考えられる。このことから、コリント式柱頭が2種類あったとするのは妥当であろう。

ところで、アスクレピオス神域の建設年代は、紀元前216/5年頃<sup>9)</sup>とされているが、ストアの建築部材の中には、一度使われた部材を別の部位に再利用しているものがあつた。<sup>10)</sup>したがって、現在残っている建築部材が必ずしも建設当初の部材であるとは言えず、このコリント式柱頭が何時のものか、はっきりしたことは言えない。<sup>11)</sup>

アスクレピオス神域のストアにおけるコリント式柱頭で、特徴的なことは、2種類のコリント式柱頭が同時に使われていること、アカンサスの葉が1段に12枚の柱頭もあること、ヘレニズム期の柱頭としては珍しくエロス像があること、小さい柱頭の外渦巻がプロポーションとして大きいことなどがあげられる。これらを手がかりとして、今後コリント式柱頭の復元を行う必要がある。

謝辞 本研究は平成13年度の文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(2) 海外学術調査(課題番号11691154)の助成を得た。ここに記して謝意を表する。

## 脚注

- 1) 吉武隆一他、「地中海古代都市の研究(109)メッセネのアスクレピオス神域の調査2001(1) - ストア遺構の概要」、日本建築学会九州支部研究報告第41号、2002年3月、pp.477-480
  - 2) 複数の柱頭部材(C17,C20,C21)の表面に、スタッコと思われる白い仕上げが残っていた。
  - 3) ギリシア本土のコリント式柱頭には、アカンサスの葉が2段あるもの(エピダウロスのトロス(B.C.380年頃)やデルフィのトロス(B.C.400年頃))と、1段のものがある(パッサエのアポロ神殿(B.C.430-400年頃)やリシュキュラテスのモニュメント(B.C.334年))。
  - 4) 1段のアカンサスの葉の数は、他に1段に16枚の柱頭(パッサエのアポロ神殿やリシュキュラテスのモニュメント)がある。
  - 5) 外渦巻の大きな柱頭は、コンポジット式柱頭と類似するようにみられる。しかしこの場合、丁度イオニア式柱頭の外渦巻と同じく、両角の外渦巻がアバクスより下の位置で繋がっている必要があると思われる。
  - 6) そのうち特に大きな外渦巻を持つ、または持っていたと思われる柱頭が2個あつた(C11,C17)。(写真4)
  - 7) 他の柱頭では、エロス像の膝付近が萼から立ち上がっているが、C1のエロス像は臍の付近から立ち上がり、かなり大振りである。C1部材は、他にアカンサスの葉の筋の彫りが深いなど、他の柱頭部材にはない特徴がある。
  - 8) ただシチリアには、四角くて、中央によく似た植物模様のある柱頭があることから、この点も考慮する必要がある。
  - H. Lauter-Bufe, "Die Geschichte des Sikeliotisch-Korinthischen Kapitells" von Zabern, 1987
  - 9) P. G. Themelis, Ancient Messene - Site and Monuments, Athen, p.17
  - 10) アスクレピオス神域の西ストアに使われたコーニス部材には、同じストアのエンタブラチュア部材とファスキアと、牛の頭部と盃の浮彫があり、エンタブラチュア部材を回転させてコーニス部材に転用したことが分かった。
  - 11) メッセネ考古学協会のテメリス教授によると、同じアスクレピオス神域の東プロピロンを調査した結果、紀元後1~2世紀に再建されたことが分かっており、ストアもこの時に再建したのではないかと示唆した。
  - 12) 大アカンサスの間から出る莖は、ラテン語でカウリクルス cauliculusだが、桐敷氏によると、厳密には鞘状の部分を指し、この鞘の上端には小さいカリックス calyxがついており、これを萼と訳している。通常これらの部分をまとめてカウリクルスと呼んだり、時には内渦巻まで含めてカウリクルスと呼ぶこともある。ここでは混同をさけるため、鞘状の莖を「莖状部」、その上端を「萼」とし、この萼から伸びる渦巻をそれぞれ「内渦巻」、「外渦巻」と呼ぶことにする。
- パラディオ、「建築四書」注解、桐敷真次郎訳、中央公論美術出版、1986年、p.95-96

## 図版出典

図1、Classica E. Orientale, Enciclopedia Dell' Art Antica, Roma, 1970

図2,3、著者作成

1) 都城工業高等専門学校教授 博(工)  
2) 熊本大学助教授 工博  
3) 熊本大学大学院自然科学研究科

Prof., Miyakonojo National College of Technology, Dr. Eng.  
Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.  
Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University